

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	学術論文査読の作法
別タイトル	Personal points of view about the peer review process
作成者（著者）	小竹, 良文
公開者	東邦大学医学会
発行日	2020.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 67(1). p.37-37.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	論評
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2019_058
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD83426402

学術論文査読の作法

東邦医学会雑誌の姉妹誌である Toho Journal of Medicine の Editor-in-Chief である伊豫田教授が日本外科学会の機関誌である Surgery Today の best reviewer award を受賞された、という記事が東邦大学の website に掲載されていたのを読者の皆様も記憶しておられるだろうか。Editor-in-Chief としてご活躍のうへで、英文学会誌の best reviewer に選出されるに当たっては、おそらく大変なご努力の結果と頭が下がる思いである。

ところで伊豫田教授の足下にも及ばないとはいえ、筆者も麻酔、集中治療関係の邦文機関誌、英文機関誌の査読を定期的に担当させていただいている。査読依頼は利益相反がない限り、すべて受諾する、期限内に結果を返す、という方針で対応してきた結果、日本集中治療医学会の英文機関誌である Journal of Intensive Care の editorial board からは 5 年連続で各年度 5 名の reviewer of the year に選んでいただいた。同誌は現在、impact factor 未取得ながら、仮に取得できた場合、IF 3.0 以上となる見込みであるとのことであり、若干なりとも貢献できたとすれば大変よろこばしいことである。また、昨年日本麻酔科学会の学術集会で「論文査読の作法」という演題で講演する機会を頂戴した。本稿では同講演を準備する際に集めた資料を基に査読者の役割に関して私見を披露させていただくこととした。

学会発表に先立ちいろいろと資料を集めてみたが、一番しっくりきたのが理学系の雑誌の談話室というコーナーに掲載された「投稿論文査読の作法」という論説であった(高橋洋一, 炭素 2005; 216: 57)。まず前文では「投稿論文の審査を依頼されるようになるのは editor から一本立ちの研究者と認められた訳で、名誉なことである」と述べられている。査読依頼を受けた際について面倒と考えてしまう際に思い出したい言葉である。

同論説では作法の第一として「査読者と editor の役割を理解しておくこと」と述べている。さて、editor と査読者の決定的な差はどこにあるだろうか? 著者の私見である

が、editor は不採用となった原稿の内容、quality を知っている点だと考えている。投稿数が多ければ不採用となる原稿が相当数発生するのは避けられないが、過去に不採用となった原稿より quality の低い原稿が採用となることは避けたい、と考えているに違いない。この観点から、査読者の役割は原稿の問題点を厳しく評価すること、editor の役割は過去の採用、不採用原稿とのバランス、今後の journal の方向性を勘案し、採否を決定すること、と見なすのがよいと考える。

作法の第二として「審査依頼を受けたら速やかに対応すること」と述べられている。速やかに対応すべき根拠として「投稿者の心情を忖度して」と述べられているが、個人的には、当を得た査読報告が出来ない場合には、早急に査読結果を報告することが最善の対策であると考えられる。なぜなら、採否の判断に当たって参考にならない査読が報告された場合、時間的余裕があれば editor は別の査読者に依頼することが可能であるからである。原稿あるいは査読レポートをコンピューターの記憶装置に締め切り直前まで保管しておくのが最も不適切な対応と考えたい。

作法の第三として、「査読者は掲載可否について editor に報告する採点者であり、改善のための助言者ではない」と述べられている。前述したように査読者は該当する journal に掲載できる原稿として必要な最低限の quality を忖度して、この基準に達しているか否かで採否を報告するのが仕事である。著者としては最低限の quality を達成できていない点に対しては、著者に対しては改善すべき点という形で間接的に指摘し、editor に対しては原稿の短所として直接的にコメントすることとしている。

以上、昨年の学会講演に基づいて私見を披露させていただいた。すこしでも査読を担当される際にお役に立てば幸いです。

(東邦大学医学部麻酔科学講座 (大橋): 小竹良文)

DOI: 10.14994/tohoigaku.2019-058